大久保喬樹

夢と成熟

——文学的西欧像の変貌

夢と成熟

——文学的西欧像の変貌

大久保喬樹

講談社

大久保喬樹
昭和21年生れ。横浜に育つ。昭和44年東京大学教養学部フランス科卒業。パリ大学および高等師範学校において比較文学を専攻。現在，東京女子大学文理学部講師。
著書 「パリの静かな時」(北洋社)，「クリュニーの天使—美の幻—」(小沢書店)，「遠い声遠い響」(白水社)，「楽興の時—ヨーロッパの手帖から」(音楽之友社)等。

夢と成熟 ——文学的西欧像の変貌

一九七九年十二月六日 第一刷発行

著 者 大久保喬樹

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二—一二—二一 郵便番号一一二
電話 東京(〇三)九四五—一一一一(大代表)
振替 東京八—三九三〇

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

製本所 黒柳製本株式会社

定 価 一三〇〇円

© Takaki Ōkubo 1979 Printed in Japan
落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

0095-163835-2253 (0) (文1)

目

次

序章　文学的西欧像の起源――「西洋紀聞」　7

Ⅰ

一　「舞姫」　22

二　「幻影の盾」　45

Ⅱ

三　「あめりか物語」「ふらんす物語」　64

四　「迷路」「或る女」　105

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

Ⅲ
五　「西方の人」「続西方の人」　138
六　「上海」「旅愁」　164
Ⅳ
七　「バビロンの流れのほとりにて」　206
八　「アメリカと私」　242
あとがき　279

装幀　辻村益朗

夢と成熟

——文学的西欧像の変貌

序章
文学的西欧像の起源——「西洋紀聞」

I

大地、海水と相合て、其形円なる事球（テマリ）のごとくにして、天円の中に居る、たとへば、鶏子の黄なる、青き内にあるがごとし。其地球の周囲九万里にして、上下四旁、皆人ありて居れり。（註1）

宝永六年（一七〇九年）初冬、当時の徳川六代将軍家宣つき儒官新井白石は、江戸城内において、イタリア人宣教師ジュアン・シドチを鎖国の禁を犯した科で前後四回にわたって取り調べた。

白石は、知られるように、言語学、歴史学、地理学等々の多分野で業績を残した学者であると同時に、家宣の下で事実上の最高政治顧問をもつとめた当時最大の政治家知識人であり、一方、シドチは、ヴァチカンから日本布教を命じられて、前年の宝永五年に南九州屋久島に密入国したものの、すぐに発見捕縛され、長崎を経て、江戸に送られたカトリック神父である。

この取り調べ本来の目的は、最初に述べたように、鎖国の禁を犯し、更にキリスト教布教を試

みたこの外国人の素性意図を明らかにし、しかるべき処置を決定することであったが、実際には、四回の会見を通じて、白石の訊問の内容は、シドチ個人の身の上を越え、西欧文明全般とりわけキリスト教教義に対する広汎な事情摂取に及んだ。この取り調べから六年後の正徳五年(一七一五年)頃にまとめられたと推定されるこの時の問答の記録に冠せられた「西洋紀聞」という書名はこのことをよく物語っている。これは、日本で〝西洋〟の語が書名に用いられた最初の例であるというが(註2)、明治維新に先立つ百五十年前、徳川幕藩体制が最も堅固な安定を達成して、諸外国との交渉を厳しく断っていた時代における西欧文明と日本文明の最初の本格的、原理的な対決がこの記録にはとどめられているのであり、そこに、明治維新後百年を経た現在に至る日本の西欧との交渉の出発点及び西欧像の原型が見出されると考えられるのである。

「西洋紀聞」の内容を略記すれば、上中下三巻に分れているうち、上巻は、シドチ潜入から取り調べ、獄死に至るまでの事情説明、中巻は、シドチからの聞き書きによる世界各国誌およびスペイン継承戦争を中心とする欧州動乱史、下巻は、同じく聞き書きによるシドチ来航の経緯、キリスト教義の解説とそれに対する白石の批判的感想というおおよその構成になっている。

引用したのは、その中巻の巻頭部分、世界各国事情の前置きとして、地球の基本的構造を述べた箇所である。これは、正確にはシドチからの聞き書きではなく、白石が当時所有していた十七世紀明代にマテオ・リッチによって製作された万国坤輿図に付された説明をそのまま転用したものであるが(註3)、この極めて素朴な、一種、天地創造神話を思わせるような地球構造の説明を、各国事情概説に先立って導入的にひいたことは、白石の世界認識がその根本においてどういうものであったか知るうえで、極めて示唆的な事実であると考えられる。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

最初に記した学者としての業績にうかがわれるように、また、「西洋紀聞」自体が雄弁に語っているように、白石は元来、非常に旺盛かつ広汎な学問的好奇心に恵まれた人物であり、同時に、その政治上の地位によって、この好奇心を満たすべく、種々の情報、とりわけ諸外国についての情報を可能な限り収集することのできる立場にあったといえるが、その彼をしても、外国に対する知識は極めて限定されたものだった。それは、「西洋紀聞」上巻中、白石が、万国坤輿図をはじめとする所蔵の世界地図数種をシドチに示してその意見を聞くやりとりに歴然としている。八代将軍吉宗が、キリスト教関係書を除く外国書の輸入を許したのは一七二〇年、やがて蘭学が本格的に興隆し始めたのは十八世紀後半から十九世紀前半にかけてのことであり、白石の時代は、政治体制としても、また精神状況一般としても、徹底した鎖国状態に置かれていたのである。

そういう、深い井戸の底に閉塞されたような状況において、西欧人シドチからじかにヨーロッパ諸国をはじめとする外国諸国事情を聞き及んだ時、白石にとって、このシドチの語る〝世界〟は、いわば、この井戸の底からはるか上方にみえる外界のように映ったと考えられる。それは、恐らく、現在の我々が、諸外国を、同じ地球平面上の諸国として並列的に、水平的に眺める感覚とはまるで違う、むしろ垂直的な感覚、たとえて言えば、地球上から別の遠い天体上の世界を望見するような感覚で眺められるのである。

「大地、海水と相合て、……」という一節が導入的にひかれる心理的な意味はそこにある。それは、まさに、この遠くかけ離れた天体上の世界に近づいていく最初の段階として、その天体全体を眺望する記述なのである。もし、白石が、現在の我々のように、西欧をはじめとする中国以西

の諸外国を並列的に、水平的に眺めていたならば、この一節は不要のものであり、それに続く五大州の説明から始めればよかったはずである。だが、白石にとって、これらの〝世界〟は、別の次元、別の平面の世界なのであり、そこに入っていくためには、まず、宇宙飛行士が地球の姿を描写し、あるいは、天文学者が月や火星の状況を説明するように、この異質な世界をのせている平面そのものの記述を行わねばならないのである。

2

この地球構造の説明に続いて、白石の記述は、その地球の基本的地理区分、すなわち、五大陸とそのそれぞれに属する諸国家名の列記に進み、ついでいよいよ、中巻の主要部をなすそれら諸国の地誌に入っていく。

そのうち特異なのは、たとえば、次のようなフランス国誌の場合である。

ガアリヤ（またラテンの語に、フランガーレキスとも、フランガーレンギョムともいふ。そのレキス・レンギョムといふは、国といふがごとしといふ也。また、イタリヤの語には、フランスヤとも、フランガーレイキともいひ、ヲ、ランドの語には、フランスといふ。漢に訳して、仏郎察（フランサツ）といふ。むかし我俗ガリヤンといひしは、ガアリヤの転訛せし歟。）ヨウロパ西海の上にありて、イターリヤ・イスパニヤ・ヲ、ランデヤ等の地に相接す。また、ソイデーアメリカの地を併せ、新たに国を開きて、ノーワーフランスヤと号すといふ。

按ずるに、此国の商舶、むかしはこゝに来れりといふ。其事いまだ詳（つまびらか）ならず。或人の説

に、「大明の書に、仏郎機国と見えしは（仏狼機とも、発郎機とも）、ポルトガル也」といふ。心得られず。漢に訳して、波尓杜瓦尓（万国坤輿図に）・波羅多伽児（武備志に）・蒲麗都家（世法録に）と、いふがごときは、すなはちポルトガル也。仏郎機は、フランガーレイキ・フランガーレキス等を訛訳せしに似たり（フランガーレイキ等を、仏郎機と訳せしは、ポルトガルを訳して、蒲麗都家といひ、カステイリヤを訳して、加西郎といふがごとし）。亦按ずるに、「西洋人大明に通ぜし事は、武宗正徳十二年、仏郎機国の入貢を始とす」と見えたり。其正徳十二年は、本朝永正十四年に当りぬれば、番舶始て我国に来りし天文十年よりは前なる事、廿四年におよべり。

この記述に特徴的なことは、一見して分るように、国名呼称、表記についての検討が異常なほど執拗に行われていることである。

はじめに触れたように、言語学は、白石の学問的関心の集中された領域のひとつであり、そこから「東雅」等の業績が生れているわけであるが、そうした白石本来の言語学的志向を考慮したとしても、なお、この国名考証の執拗さは並はずれている。それは、とりわけ、あとに続く肝心の地誌の内容自体の乏しさと照らしあわせる時、一層、顕著な事実である。極端に言えば、国名考証が主であって、地誌そのものは従であるというような感さえ抱かせるほどである。

この事実は、恐らく、次のようなことを物語っている。

すなわち、白石にとって、フランスという国家は、何よりもまず、国名概念として映っていたということである。ヨーロッパ中央部を占めるこの国の具体的な広がりは、全く、白石の意識関

心の中にない。ただ、世界諸国家名という体系の中の一項としてこの国はあるのである。そうであればこそ、名称についての考証が記述の主部をなすのであり、それも、名称と実体との間の関係を問うのではなく、逆に、名称同士の間の整合性を問うという方向で考察がすすめられるのである。

確かにこのフランスの場合は極端な例であるが、この諸国誌全体を通じて、多少の差はあれ、このような傾向はいずれの国についても見られると言える。

3

こうして西欧は、白石にとって、抽象的なレベルでとらえられた概念的な世界であったと考えられるが、そういう世界から白石の精神に最も強く訴えかけ、働きかけてきたのは観念に他ならない。観念こそは、現実感覚を越えた抽象的な論理の次元で機能しうる要素だからである。「西洋紀聞」中の頂点をなす下巻のキリスト教教義紹介及びそれに対する徹底した原理的批判は、このような現実感覚から切り離された純粋に観念的な次元での西欧理解を示すものといえる。

シドチからの聞き書きによるキリスト教教義、教史の記述は、天地創造からプロテスタンティズム創始に至る全体をほとんど事項のみを羅列して述べたものであるが、全体として、簡略ながら、極めて的確な、見通しのよいものであると言える。一例としてその始まりの部分を引用する。

「天主の教、我いまだ聞所あらず。其大略を聞かむ」と問ふ。「大凡、物自ら成る事あたはず。

必これを造るものを待得て成る。今試に一堂の制を見るに、其制自ら成る事あらず。必工匠を待えて成る。一家の政を見るに、其政自ら治るにあらず。必君長を待えて治る。天地万物、これに主宰たるものあらずして、成る事あらず。其主宰名づけて、デウスといふ（デウス、漢に天主と訳す）。デウス初に天地万物を造らむとするに当りて、まづ善人を住しめむために、諸天の上にハライソを作り（ハライソとは、漢に訳して、天堂といふ。仏氏いはゆる極楽世界のごとし）、無量無数のアンゼルスを作る（アンゼルスは、仏氏いはゆる光音天人の類。ポルトガルの語に、アンジョといふなり）。其後に、大地世界を作りて、タマセイナを取て（タマセイナ、此に清浄土といふが如し）、男を作りて、アダンといひ、其右脇の一骨を取て、女を作りて、エワといふ。すなはちこれ人の始也。彼男女をして夫婦となし、テリアリの地に居らしめ（テリアリ、こゝに安楽国土といふがごとし）、其余の地をば、鳥獣のある所とす。

こうしたシドチの説をまず忠実に記したあと、白石はこの説全体を評して、まず、「按ずるに、西人其法を説く所、荒誕浅陋、弁ずるにもたらず。しかりといへども、其甚しきものゝごときは、また弁ぜざる事を得べからず。」と述べ、続いて、逐一、徹底した批判反論を加える。

この批判を整理すると、およそ三つの論法が見出される。ひとつは、〝デウス〟に対する漢訳語〝天主〟をとりあげて、元来、この訳語は、〝エイズス〟に対する〝耶蘇〟と同様、原語の発音をうつすためのあて字として採用されたものであるにもかかわらず、語義をもうつしたものと誤解された結果、儒教の伝統的概念である〝上帝〟と混同されてきたが、本来、〝デウス〟は〝上帝〟とは無縁の語であるという言語学的立場からする検討批判である。ついで、ふたつめは、

〃ハライソ〃すなわち〃極楽世界〃、〃アンゼルス〃すなわち〃光音天人〃等々のように、語彙についても、また、種々の教説についても、キリスト教は仏教の亜流にすぎず、論弁するに足らないという批判であり、最後に、三つめは、「天地万物自ら成る事なし。必ずこれを造れるものあり」という説をとりあげて、もしそうであるならば、万物の創造主であるデウス自身は何ものによって造りだされたのか、逆にいえば、デウスが自ら生れえたならば、何故天地万物も自ら生れえないと言えようかという論理的矛盾を指摘する批判である。

これら三つの論法は、それぞれが白石の思考の特質を示しているといえるが、この場合、そこで共通していることは、結局、白石が対象たるキリスト教教義を内的に、その固有の思考原理に従って理解することをせず、すべて、外側から、概念的に、別次元の論理、尺度を適用して理解、批判しているということである。

とりわけそのうちでも著しいのは、三つめの論法としてあげた、命題論理上の矛盾を指摘して批判するあり方である。宗教という非論理的ないし超論理的な要素を多分に含み、かつ、広大な歴史的背景に支えられた文化原理を、論理的に整合しないとして否定するこの批判のあり方は徹底したものである。

言うまでもなく、このような白石の態度の根底には、キリスト教に限らず、仏教をも含めて宗教というもの自体を基本的に不合理な、迷妄をもたらすものとして認めない儒者としての立場が強く働いており、また白石生来の論理的性格がこれに加わっていることも否めない。だが、そういう事情を加味して判断しても、なお、ここには、白石という十八世紀初頭の日本知識人が、西欧文明を完全に抽象的な次元で受けとめ、対応していたことが決定的に示されていると考えられ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.